明星大学 人文学部人間社会学科 ニュースレター

JIN-SHA YELL

ジンシャエール
2020.Nov.
Vol.
26

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール（声援）を送ります！

学科交流会を実施

１年生の学科交流会を2020年９月11日に実施しました。当日は３教室にわかれ２時間限定という制約はありましたが、１年生からは「実際に会うととても印象が変わった、楽しかった」、「友達できるか不安だったが、できて良かった」、「とても緊張していましたが先輩方が気さくに話しかけてくださり、楽しく参加することが出来ました」など、概ね好意的な感想が寄せられました。さらに「大学生になったという実感が少しだけわきました」との本音も聞かれました。またZoom参加者からも「画面越しにですが同級生と対面出来てよかったです。早く登校したいという気持ちがより強くなりました。このような会を開いていただき、またオンライン整備をしていただき、ありがとうございました」との感想が届きました。当日、企画運営にあたった２年生の感想を以下掲載します。（竹峰）

一年生の交流会
人が人と会うということ

９月11日、学科で実施された１年生の交流会を企画しました。この交流会は本来なら存在しない、行われるはずのないイベントです。しかし、３月から世の中は一変し、それまでの当り前が当たり前ではなくなってしまいました。「大学生がキャンパスに行き、仲間と会い講義を受ける」ことも当たり前ではなくなりました。そうしたなか２年である私たち、それより上の３・４年生ですら戸惑った時間でした。その中でもおそらく一番つらかったのは１年生ではなかったかと思います。本来なら４月からキャンパスに通い、仲間ができ、楽しく過ごすはずだった時間がなくなり、同級生とも一度も会えなかった、そんな人も多かったと思います。

そのため、このようなイベントを急遽開催することになりました。企画してみないかと先生からお誘いをいただき、少しでも１年生の力になりたく、フレッシュマンキャンプを準備していた仲間を誘い準備しました。

当日の１年生の生き生きとした目や活気あふれる様子に胸が熱くなりました。企画した仲間とたくさん意見を言い合い、このような会を行えたことを本当に良かったと思いました。そして何よりも、イベントを開催していただいた学長をはじめとした大学の運営の方々、陰ながら支えてくださった事務の方々、事前の会議や当日も参加してくださった先生方、一緒に企画した仲間、そして足を運んでくれた１年生には心より感謝しています。

ありがとうございました。

２年　伊藤美奈・井上兼慎・小田裕起・川口大凱・竹丸響稀
日景愛子・福西美友・藤野真央・森　鈴菜・渡辺夏菜

企画した2年生有志

最初はちょっぴり緊張

前期のオンラインで学んだクラスで初対面

まずは自己紹介

後期オンラインで学ぶクラス

最後は打ち解けて

前期オンラインで学んだクラスの仲間

GREEN PRINTING JPPI
P-D10010

SAを通して感じたこと

社会調整法Aの授業より

3年　末野佑樹

私は、1年生の必修科目である鵜沢先生の「社会調査法A」でSAを務めました。SAを務める中で、特に頑張ったことは、ワークショップの開催です。私を含め、菅野凌太くんと安野紗弥さんの3名のSAが、1年生同士の交流を目的としてワークショップを計画し、開催しました。Zoomのセッション機能や反応機能を上手く活用し、1年生と楽しい時間を過ごせたと思います。ワークショップ後の受講者アンケートでは、「楽しかった」、「またやりたい」という声がたくさんあり、とても温かい気持ちになりました。また、授業で行う「インタビュー実習」の前に、ワークショップを行えたことによって、1年生がZoomの操作方法をある程度わかった状態で、インタビューを迎えることができ、学びの質を高めることができたと思います。

今年の1年生は、「例年よりも提出物のクオリティーが高い」と先生が唸るほど、優秀でした。その要因には、オンラインだからこそ、周りを気にせずに、一人で集中して聞けるという利点が関わっていると思います。今後も、しばらくオンライン授業が続くと思いますが、オンラインならではの「良さ」を活かし、私自身も学習に励んでいきます！

講義の実際

1年生が全員履修している必修授業の時間をつかって、先輩学生の協力のもと、学生どうしのつながりをつくるイベントも行いました。

※撮影は学生の許可を得て行っています。

メンバー紹介（※イラストはイメージです。）

RYOTA

SAYA

YUKI

コロナ禍における人間社会学科の取り組み

コロナ禍で、前期の授業は明星大学においても一部の授業を除きオンライン授業となりました。一年生にとってはとりわけ、大学に足を踏み入れることもできず、入学した実感が持てない大変な日々であったことと思います。そんな中、人間社会学科では、私たちにできることを精一杯取り組みました。各学年のゼミにおいて、Zoomなどを用いた双方向性の授業を工夫するのは勿論のこと、オンライン授業に必要なPCを持っていない学生へのPCの貸し出しや一年生の必修授業における上級生のSA(スチューデントアシスタント)としての支援など。その試みのいくつかに、本号のジンシャエールでふれて頂ければと思います。後期には、十分な感染予防対策をとっての大学での対面試行授業が始まります。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

学科主任　鵜沢由美子

Zoomでも、だからこそ
――オンラインでのゼミ活動

2年　渡辺夏菜・日景愛子・井上兼慎

2年の竹峰ゼミ

このような世の中になってしまい、なかなか人に会いづらくなってしまいましたね。そんな中、本来顔を合わせてディスカッションをし、フィールドワークに行く私たちのゼミがオンラインで何をしたのか少し紹介しようと思います。

私たち2年の竹峰ゼミは今年度の前期は、毎週一人のゼミ生がディスカッションしてみたいことを持ち寄り、司会をして、みんなで議論するすることをやりました。もちろんZoom上です。

ゼミ生は12人いるのですが、みんな本当にそれぞれ多種多様な議題を持ち寄って来るものです。コロナ禍の話題もありましたが、人種差別、国籍、不登校、さらに「死後の世界」についても話し合いました。毎回どんなテーマが出て、どんな議論に発展するのか、なかなかに刺激的でした。

こうやって楽しく、そして有意義に前期を乗り越えたわけですが、後期は毎週一人のゼミ生がゲストをZoom上に招待して、みんなの前でインタビューし、議論しあうという新たなことに挑戦しています。どんなゲストが来るのかは秘密です。どんな人の話が聞けるのか、オンライン授業を嘆くだけじゃなく、せっかくなので全力で楽しんでいきたいです。

それでもやはり人には直接会いたいもの、少しでも早くフィールドワークに行けるようになるといいですね。

3年の竹峰ゼミ

3年の竹峰ゼミでは、広島合宿（2020年2月4日～6日）で得たことをまとめてオンライン上で報告会を夏休み中に開催しました。韓国やフィリピンで現地の社会に飛び込んだ学生の発表も交え、各自がこれまでフィールドワークなどで調べ学んできだこともふまえ、Zoom上で画面共有を駆使して発表しました。

当日は場を超えて集うことができるZoomならではの報告会となり、広島合宿でお世話になった方を含め50名を超える方にご参加いただきました。質疑応答では、調査でお世話になった方々、さらには他大学の学生や教員も参加し多彩なコメントをいただきました。いつものゼミとは違う緊張感と刺激を得て、これから取り組む卒論へのヒントが得られる場ともなりました。

広島合宿　平和公園フィールドワーク

広島合宿にてお世話になった方との交流会

先を見通した学修

4年　横田　陸

私は通学の教職課程に加え、通信教育部を利用し、小学校の教員を目指しています。大学４年生になり、５月に中学校の教育実習、７月に小学校教員採用試験、９月に小学校の教育実習がある予定でした。しかし、コロナの影響から、全国の学校が休校になり、教育実習が延期になってしまいました。混乱してしまったこともありましたが、時間ができた分、採用試験の勉強に集中することができました。その結果、一次試験に合格し、現在は二次試験の発表待ちです。

９月、10月には小学校、中学校と連続で教育実習があります。例年では起こりえない日程になっており、それが終われば、卒論を書き上げなくてはいけません。とても忙しい日々が続きますが、幸い卒論は２年生の頃からはじめ、もうすぐ仕上がるところまで進めています。もし、その準備がなかったらと思うと…、想像したくありません。

コロナ禍における生活で、先を見通して学修することの大切さを学びました。後輩には時間があるうちに卒論を進めたり、資格をとったりするなど、先を見通した行動を送ってほしいです。今回のコロナのように、予想できないことが起こるかもしれません。何事も早めに準備をしておけば、必ず４年生になったときに役立ちます。

卒論の調査のために訪れた
フィールド（2019年９月）

コロナ禍における社会意識
社会調査実習の計量データを用いて

人間社会学科はフィールドワークだけでなく、数値データを用いた実習もおこなっています。今回は、社会調査実習でおこなった全国規模のインターネット調査（2020年８月実施）で収集した計量データを集計し、コロナ禍における社会意識を世代別に検討してみました。

新型コロナウイルス感染がおさまりません。学生だけに限らず、すべての人々に大きな不安を与えていることは、皆さんもご存知のとおりです。そうしたなか、経済活動と自粛の両立をどのようにおこなうべきか議論されていますが、世の中の人々はどのように考えているのでしょうか。

図１　経済活動よりも自粛する方が大事だ

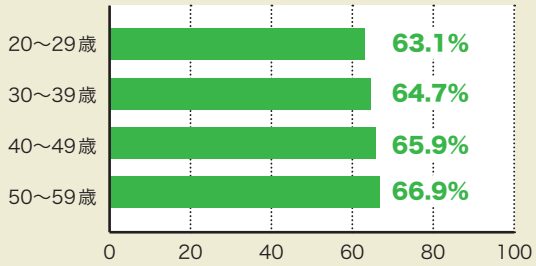
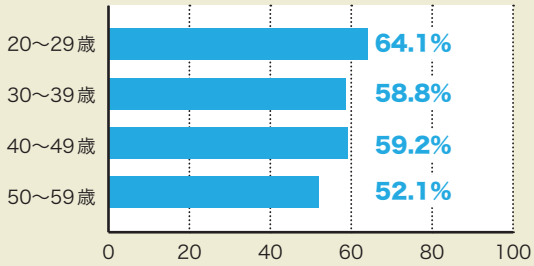


図２　自粛することでストレスを感じる



データ分析の結果である図１をみると、どの世代も65%前後が「自粛する方が大事だ」と回答しており、世代差はほとんどないようです。ただ、図２に示した「自粛することでストレスを感じる」のは20 ～ 29歳で64.1%である一方、50 ～ 59歳は52.1%となっています。つまり、どの世代でも、自粛することへの意識は同じであるにもかかわらず、自粛でストレスを感じるのは若い世代であるということが、ここから読み取ることができます。何らかの政策を実施するにも、一律におこなえば良いというわけではないことが、ここで示唆されているのかもしれません。

このような社会全体の傾向は、みなさんの生活している範囲だけで知ることはできません。さまざまな調査方法を学び、社会のおおきな傾向を知ることも社会学の重要なポイントとなっています。

人文学部人間社会学科事務室
東京都日野市程久保2-1-1　TEL.042-591-5111（代）
明星大学　人文学部人間社会学科HP
http://www.hino.meisei-u.ac.jp/soci/

発行：2020年11月30日